

陸上競技規則の変遷について

菅沼史雄・石井美弥子

1. はじめに

スポーツの内容をとらえるとき、その内容の範囲はかなりあいまいである。しかし、その本質的特徴は、卓越性を求めて努力することである。かたちのうえでは、個人あるいはチームといった形態をとるが、そこでは規定された限界内において、相手よりも優れていることを証明することが競争スポーツの目的である。

社会生活の営まれているところにはルールが必要であり、存在するように、スポーツの社会においても秩序を保つために、参加する人々の間に共通に従うべき規範がつくられている。スポーツ社会における行動基準となるもののひとつにルールがあるが、運動競技の各種目ごとにつくられているルールは、スポーツ社会の規範のなかでは最も明確なものである。スポーツ規範におけるルールは競争＝競技のためのものである。すなわち、競技が安全かつ公正に能率的に行なわれるための準則であり、その背景には競走の本質的原理である平等の条件が設定されている。スポーツの中では単純な種目といえる走、跳、投の陸上競技におけるルールも他の種目と同様、年々競技規則が改正されている。それは何故だろうか。その理由としてまずいえることは、人間の知恵の発達のために、人間の能力が最大限発揮できるような条件づくりがなされているからである。記録の向上と非常に結び付きの深い技術、施設、用器具への開発の努力がなされる限り、記録向上に有利な方向へ改定されるだろう。技術との関連においてみてもルール＝競技規則というものは、つねに技術的なレベルに応じたものが求められているゆえ、技術の高度化が規則の変更をもたらすといえよう。また制約条件下のなかでの運動の合目的性、経済性の追求から新しい技術の開発、あるいは器材、器具の開発がおし進められ、結果に重要な価値が付与せられるようになったために、ルールは著しく細分化され高度なものになってきた。そのため現在では人間の能力をこえた機械の判定にまたなければならなくなっているところもでてきている。たとえば今回のオリンピック・ミュンヘン大会におけるトラック競技の決勝線には、決勝柱はおろかテープもなく、決勝審判員や計時員の姿は全然みられず、順位判定や時間の計測は機械装置にまかされ、従来の決勝線というものから程遠いものになってきている。また、電気計時となってからは記録の頭打ということも関連して計測も1/100秒というようにこまかくなってきた。ルールというものを余りにも厳格に解するならば、いいかえれば科学化とそのひずみは、一例をあげるなら、スポーツの中で単純といわれる陸上競技の記録が過去との比較はもちろん、現在における比較もできなくなるような事態がひきおこされるのではないだろうか。これらの問題も含めて本稿においては、現在までに入手できた資料において、わが国が国際的に進出するまでと、国際的に共通のルールがつくられて以後のルール改変についてとらえた。

2. 陸上競技の発展過程（競技会と組織について）

陸上競技は相手がいなくても成立する記録スポーツであるが、記録が海を渡ることによってはじめて国際的なものになる。そこには比較できる共通の基準が求められるからである。そこで、競技会の歴史と統轄組織すなわち、国内組織の創設および国際陸上競技連盟が創設されるまでの発展過程をみている。

歴史的にみて最初の競技会とされているのは 1864 年 5 月 5 日 Oxford の Christ Church Ground で行なわれた Oxford と Cambridge との対抗競技会とされている。このときの種目と記録は次のとおりである。

100 yards	B. S. Darbyshire (O.)	$10\frac{1}{2}$
440 yards	B. S. Darbyshire (O.)	56.0
1 mile	C. B. Lawes (C.)	4:56.9
120 yards hurdles	A. W. T. Daniel (C.)	$17\frac{3}{4}$
200 yards hurdles	E. Wynne-Finch (C.)	$26\frac{3}{4}$
Steeplechase	R. C. Garnet (C.)	10:00.0
High jump	F. H. Gooch (O.)	5 ft. 5 in. (1.65 m)
Long jump	F. H. Gooch (O.)	18 ft. 0 in. (5.48 m)

また、最初の国際競技会としては、1895 年 9 月 21 日 New York の Manhattan Field で行なわれた New York Athletic Club と London Athletic Club の対抗競技会である。（さほど重要とはされていないが、その前年に Yale と Oxford の対抗戦が行なわれている。）このときアメリカは全種目優勝した。

100 yards	Bernard Wefers	$9\frac{4}{5}$
200 yards	Bernard Wefers	$21\frac{3}{5}$
440 yards	Thomas Burke	49.0
880 yards	Charles Kilpatrick	$1:525.\frac{2}{3}$
1 mile	Thomas Conneff	$4:18\frac{1}{5}$
3 mile	Thomas Conneff	$15:36\frac{1}{5}$
120 yards hurdles	Stephen Chase	$15\frac{2}{5}$ (loose top rails)
High jump	Michael Sweeney	6 ft. $5\frac{5}{8}$ in. (1.97 m)
Long jump	Edwin Bloss	22 ft. 6 in. (6.86 m)
Shot put	George Gray	43 ft. 5 in. (13.23 m)

第1表 オリンピック大会における陸上競技実施種目

OLYMPIC YEAR (Discontinued Events)		1896	1900	1904	1908	1912	1920	1924	1928	1932	1936	1948	1952	1956	1960	1964	1968	1972
		(MEN)																
1	100 METER DASH	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
2	200 METER DASH		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
3	110 METER HURDLES	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
4	400 METER HURDLES		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
5	400 METER RUN	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
6	800 METER RUN	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
7	1,500 METER RUN	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
8	400 METER RELAY				○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
9	1,600 METER RELAY				○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
10	5,000 METER RUN					○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
11	10,000 METER RUN					○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
12	3,000 METER STEEPLECHASE						○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
13	10,000 METER WALK					○	○	○				○	○					
14	20,000 METER WALK													○	○	○	○	○
15	50,000 METER WALK									○	○	○	○	○	○	○	○	○
16	RUNNING BROAD JUMP	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
17	POLE VAULT	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
18	RUNNING HOP STEP AND JUMP	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
19	RUNNING HIGH JUMP	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
20	SHOT PUT	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
21	DISCUS THROW	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
22	HAMMER THROW		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
23	JAVELIN THROW				○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
24	DECATHLON					○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
25	MARATHON	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
(WOMEN)																		
1	100 METER DASH								○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
2	200 METER DASH											○	○	○	○	○	○	○
3	80 METER HURDLES									○	○	○	○	○	○	○	○	○
4	100 METER HURDLES																	○
5	800 METER RUN								○						○	○	○	○
6	1,500 METER RUN																	○
7	400 METER RUN															○	○	○
8	400 METER RELAY								○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
9	RUNNING BROAD JUMP											○	○	○	○	○	○	○
10	RUNNING HIGH JUMP								○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
11	SHOT PUT											○	○	○	○	○	○	○
12	DISCUS THROW								○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
13	JAVELIN THROW									○	○	○	○	○	○	○	○	○
14	PENTATHLON															○	○	○

第1表のつづき

		OLYMPIC YEAR																
		1896	1900	1904	1908	1912	1920	1924	1928	1932	1936	1948	1952	1956	1960	1964	1968	1972
(Discontinued Events)																		
(MEN)																		
1	60 METER RUN		○	○														
2	FIVE MILE RUN				○													
3	200 METER HURDLES		○	○														
4	2,500 METER STEEPLECHASE		○	○														
5	3,200 METER STEEPLECHASE				○													
6	4,000 METER STEEPLECHASE		○															
7	8,000 METER CROSS COUNTRY					○												
8	10,000 METER CROSS COUNTRY						○	○										
9	3,000 METER WALK						○											
10	3,500 METER WALK				○													
11	10 MILE WALK				○													
12	TEAM RACE (RUNNING)		○	○	○	○	○	○										
13	CROSS COUNTRY TEAM RACE					○	○	○										
14	ALL-AROUND CHAMPIONSHIP		○	○	○	○												
15	STANDING BROAD JUMP		○	○	○	○												
16	STANDING HOP STEP AND JUMP		○	○														
17	56-LB, WEIGHT			○			○											
18	DISCUS THROW—GREEK STYLE				○													
19	PENTATHLON					○	○	○										
20	SHOTPUT (BOTH HANDS)					○												
21	DISCUS THROW (BOTH HANDS)					○												
22	JAVELIN THROW (BOTH HANDS)					○												
23	JAVELIN THROW (FREE STYLE)				○													

J. V. Grombach "Olympic Guide" AVON BOOK 1964 より

Hammer Throw James Mitchell 137 ft. $5\frac{1}{2}$ in. (41.90 m)

近代スポーツの促進はオリンピック大会が行なわれたことに最大の原因があるが、ことに陸上競技はオリンピックのメインイベントとされ、大きな恩恵をうけ、第1表のように、第1回は12種目であったが回を重ねるにつれ種目も増えミュンヘン大会では37種目にもなった。オリンピック大会が、性格、参加者共に真に国際的といわれるようになったのは1908年のロンドン大会からである。

このように、陸上競技はオリンピックとともに発展してきたのであるが、競技の発展過程と関連のある、統轄組織＝国内組織についていくつかの国々についてみると、近代陸上競技の発生地ともいべき英国が1880年、以下ニュージーランド1887年、アメリカ1888年、ベルギー、カナダ1889年、スウェーデン1895年、ノルウェー1896年、オーストラリア、チェコ・スロバキア、ギリシア、ハンガリー1897年、ドイツ1898年である。陸上競技の国際的組織は1912年の第5回大会のときに16ヶ国が集まり、国際陸上競技連盟(I. A. A. F.)が創設され、第1次大戦のため中断したが、1921年になって国

際共通の競技規則と世界記録公認制度を決定したのである。このような歴史のなかで、わが国においては 1874 年、東京の海軍兵学寮で開かれた競争、遊戯会や、1878 年の札幌農学校での遊戯会が日本での陸上競技のはじめとされている。1883 年 6 月 16 日、F. W. Strange の指導の下に行なわれた東京大学運動会が一時的には衰退があったが、1911 年大日本体育協会が組織されるまでは日本の陸上競技の中心であった。しかし、はじめのうちは運動会の域をでなかった。日本の陸上競技会が運動会時代から競技会時代へ急に転換することになったのは、1912 年第 5 回オリンピック大会に参加してからであり、1911 年大日本体育協会が組織され、競技会としてのオリンピック選手選抜競技会が開催された。多くの問題をかかえていたが 1924 年には体協から国際陸連に加盟し、1925 年 4 月 18 日、日本陸上競技連盟が大日本体育協会から独立創設され、日本記録の公認、翌年には競技規則を制定したのである。そこで、わが国が国際的に進出するまでのルールと、国際共通のルールができてからの改変について考察してみよう。(第 2 表)

3. 競技規則の改変について

現在の競技規則はつぎのような内容からなりたっている。(1) 競技会を運営するところの競技役員およびその任務。(2) 競技時間、競技の進め方、勝敗の決め方などの競技会規則。(3) 競技者のとくに技術的な行動の仕方を規定するところの競技規則。(4) 用器具の規格についてである。これらの内容が毎年、改修正されるのは、スポーツのなかで単純といわれる陸上競技が、国際陸連の加盟国が現在、140 ケ国以上というように世界のすみずみに普及しており、また、人間の知恵の発達から不正、反則を未然に防ぐために、いろいろな事態を予想して規定を具体的に定められているからである。そのそこに流れている規則の精神は公平無私にある。

競技規則のうつりかわりを年代別に区分すると、(1) I. A. A. F. が創設される以前のルール。(2) I. A. A. F. が創設されたときのルール (1921 年～1935 年)。(3) 競技水準が高度化のみちをたどりはじめた 1936 年～1951 年。(4) 1952 年～1964 年。(5) 1965 年～1972 年におけることができるだろう。(2)、(3) においてはルールはほとんど修正されなかったが、(4)、(5) においては施設、用具の発達から、それに適応するように競技技術もかわり、施設、用器具や競技技術に対する規定が改修正されているのが目立つ。(第 3 表) それは人間の記録の向上への欲求の強さからルールの盲点をつくようなものがあらわれ、また、反則あるいは勝敗の判定がむずかしくなったからでもある。

(1) 初期のルール

日本で全国的な競技会がはじめて開かれたのは、1911 年羽田の運動場で行なわれた体協主催の、第 5 回オリンピック派遣選手選考予選会である。また、日本選手権は 1913 年からはじめられたが、その時の審判および競技規定は、今村次吉が 1903 年東京帝国大学運動会のために編さんしたものを同氏が修正して使用した。オリンピック予選会も大同小異であるが、それには投てき種目はなかった。今村次吉がつくったところの日本ではじめての競技規則をみると、現在の細分化されたルールと違って非常に簡単なものである。内容は、① 審判長の任務、② 競走の合図の仕方および反則に対するハンディキャップについて。③ 付添人の競技場入場禁止。④ 競技者に配布されるゼッケン。⑤ 100 m 競走、リレー・レース、チーム・レース、15 里競歩、走高跳、立高跳、走幅跳、立幅跳、棒高

第2表 競技規則のうつりかわり

1936	1952	1965
〈競技会の組織〉	○ 〈大会役員〉	○ 〈競技会役員〉
役員	○ 大会役員	○ 競技会役員
総務	○	○
	□ 秘書	○
	□ 技術総務員	○
	□ 上訴審判員	○
	□ 各審判員	○ 審判長
審判長	○ 審判員	○
監察員	○	○
召集員	○ 召集員 (出発合図員補助員)	○ 出発係
跳躍審判主任および審判員	△	
投てき審判主任および審判員	△	
跳躍記録員	△	
投てき記録員	△	
決勝審判主任および決勝審判員	△	
競歩審判員	△	
計時主任および計時員	○ 計時員	○
出発合図員	○	○ スターターおよびリコー ル・スターター
競走記録員	○ 記録員	○
周回記録員	○	○
計測員 (および器具係, 戦前まで)	○ 公式検定員	○ 公式計測員
場内司令	○	○
新聞記者係	○ 通告員	○
〈競技総則〉	○ 〈競技会規則〉	○
参加資格と申込	○ 申込	○ 申込み
予選競技	○ ラウンド, 予選と準決勝	○ 予選式組合せ
競技	○ 競技会	○
刺激剤の使用 (Dopping)	○ 刺激剤 (Dopping)	○
競技の順序	△	
距離の測定	○ 計測と計量	○
付添人	△	
同成績	○ 同着と同記録	○ 同成績
異議	○	○ 抗議
日本記録および日本国際記録	○ 日本記録と日本国際記録	○ 世界記録, 日本記録と日本 国際記録
使用器具	○ 公式陸上競技用具	○ 公跳陸上競技用器具
跳躍競技	○ 〈跳躍競技〉 (走高跳, 立高跳, 走幅跳, 三段跳, 棒高跳)	○ 跳躍競技 (走高跳, 棒高跳, 走幅跳, 三段跳)
総則	○	○
走高跳	○	○
立高跳	△	

第2表のつづき

1936		1952		1965
棒高跳	○			○
走幅跳	○			○
立幅跳	○	立高跳と立幅跳		△
三段跳	○			○
<投てき競技>	○	<投てき競技> (ハンマー, 砲丸, 円盤, やり)	○	<投てき競技> (やり投, 円盤投, 砲丸投, ハンマー投)
総則	○			○
やり投	○			○
円盤投	○			○
砲丸投	○			○
重錘投	△			
ハンマー投	○			○
<競走競技>	○			○
トラックおよび走路	○	トラックとコース		○
決勝線	○	スタートと決勝		○ スタートとフィニッシュ
110 m ハードル競走		} ハードル競走		
200 m ハードル競走	○			○
400 m ハードル競走				
リレー	○	リレー競走		○
団体 (チーム) 競走	○	チーム競走		○
障害物競走	○			○
断郊競走	○	クロスカンントリー競走		○
マラソン競走	○			○
<競歩>	○	<競歩競技>		○
競歩の定義と規定	○	競歩競技		○
<混成競技>	△			
5種競技		} 五種競技と十種競技		
10種競技	○			○
<雑種競技>	△			
綱引	△			
<公式器具規格規定>	○	<公式用具 (Implements) と器具との規格>	○	<公式器具と規格>
跳躍用具規格	○	跳躍用具 (Standards)		○ 跳躍用器具
棒高跳用棒	○			○
踏切板	○	踏切板 (走幅跳と三段跳)		○
やり	○			○
円盤	○			○
砲丸	○			○
重錘	△			
ハンマー	○			○
ハンマー投用のかこい	○			○ ハンマー投, 円盤投用の囲い
投てき用サークル	○	サークル		○

第2表のつづき

1936		1952		1965
ギリシヤ形円盤投用台	△			○
砲丸投用足留材	○	足留材 (砲丸投)		○
投てき角度とその標示	○	サークルあるいは円弧から 投げる投てき角度		○
投てき角度標示旗	○	角度標示旗		○
決勝審判台	△			
ハードル	○			○
バトン	○	リレーバトン		○
発走材 (Starting Block)	○	スターティングブロック		○
	□	決勝柱		○
<女子競技規則>	△			
役員				
競技の順序				
日本記録および日本国際記 録				
跳躍総則				
走高跳				
投てき競技総則				
80 m ハードル競走	△			
83 m ハードル競走	△			
断郊競走				
5 種競技				
やり				
円盤				
砲丸				

□ あらたに付加された事項 ○ 内容は変わらず △ 削除された事項

跳、ハムマー投、砲丸投、ベース・ボール用球投等の種目の簡単な技術的な行動の仕方が規定されている。現行規則との相違点をあげると、競走における反則（不正出発）はハンディキャップがつけられて行なわれたが、現行のそれは、おなじ競技者が2回反則した場合は失格とされている。200 m 以上の競走はオープンであったのが（ただし2米以上先行しなければ斜行することはできなかった。）現行では、400 m までの競走（800 m のスタートより100 m までと、1600 m リレーの500 m まではセパレートで行なわれている。）とハードル競走はセパレートで行なわれる点などが異なっている。走り高とび等の同成績の場合の処置が定められていないが、そのような問題がおこらなかったかどうかは疑問である。この頃の競技会の状況をみると、1913年マニラの第1回極東大会へ大阪毎日新聞社が2人の競技者を派遣し、第3回大会（1917年）が東京芝浦で開かれるなど活気を呈してきた。しかし、そこにはまだ規則の混乱があり、1925年の極東大会（マニラ）での退場事件などがもちあがった。1925年連盟が創設されたが正式の競技規則がなかったので、1925年5月フランス文の国際陸連規約を翻訳して制定した。

(2) 国際陸上競技連盟の制定した競技規則

大日本体育協会は1921年競技規則を制定したが、国際陸上競技連盟の制定したもの

(1921年) とほとんど同じで、それは現行規則にかなり近いものになってきている。ここでは役員およびその任務が明確にされ、また競技者の資格、すなわち、アマチュアであるかどうかについて資格委員会の判定によるところも目新しいものである。競技規則においては、反則の出発におけるハンディキャップ、あるいはセパレートコースについては従前のものと同じく、あたらしくハードル競走においてハードルを倒したときは、記録は認められるが着順は除外され、競走中3個以上倒したときはその競技より除名という厳しいものがつくられた。跳躍においては、走り高とびで脚部以外の部分が脚部より先に越え、着地したときには正当な跳躍とは認められず、現在のようなベリー・ロール、背面跳のようなスタイルは現われるすべもなかった。走り高とび、棒高とびのボーク・ラインも現在はないものである。これは、走り高とびにおいてはバーの手前 0.91 m、棒高とびにおいては 4.55 m のところに直線が引かれ、ラインを踏みこえることをボークと種し、ボーク 2回で1回の試技とし、バーを落したときも1回の試技と見做した。このことは競技会の順調な進行をはかるために走り高とび2分、棒高とび3分以内に試技を終らなければならないといったよう現行規則と同じ性質のものと考えられる。投てき競技においては(走り高とび、三段とびも同じであるが) 現在予選3回、決勝3回、計6回の試技ができるのは上位8名であるが、このときは上位4名とされている。(I.F.の規則では上位6名になっている) やり投げにおいては、「投てき者は踏切棒を片足あるいは両足にて踏むことを得れど、やりが地に落下せざる以前に足が踏切線を全く通過せるときはその投てきを無効とす。」で現行の「ラインを踏めば無効試技」よりは大部ゆるいものになっている。このように徐々に体裁をととのえていったのであるが、まだ不備なところもかなりあった。そして競技水準の高まりとともに競技規則の不備も目立つようになり、1936年に新たに改定された。

(3) 競技の高度化とルールの細分化について

1936年ベルリン大会を前に I.F. 制定の規則が改正されたが、これは現行規則の基盤となっているものである。第2表にみられるように各改正年度にかなり整理されてきている。1952年改正されるまでは修正は行なわなかったが、1952年以後はかなり改・修正が行なわれていることは第3表をみてもわかる。これは1936年のベルリン大会を期して第2次大戦に突入したためそのままにされていたのである。ここでは多くの改・修正が行なわれた戦後の規定あるいは改定された主な事項についてとりあげた。第3表にもみられるように1956年のメルボルン大会のときは用器具を中心に改正され、東京、メキシコ大会においては競技会規則を中心として改正されている。陸上競技規則は年々と細分化されていくが、そこにあらわれる改正や解釈の観点を整理すると、

(i) 科学の進歩にともなって用具、器具が合理的につくられ、すぐれた機能をもつようになったためそれに対する規制。

(ii) 反則の制定において、できるだけ証拠を残すことが公平であるという考え方。

(iii) いろいろな不正や反則の事態を予想して規定を具体的に定めたこと、等である。つぎに改定された主な事項を列記する。

① トラック競技におけるスタートの合図について、「用意」の合図があってからピストルが鳴る以前に、手や足が地上からはなれると不正出発とすること。スターターの位置は、従来すべての種目において、競技者から等距離の位置でかけることにしていたのを、

第3表 競 技 規 則 の

OLYMPIC GAMES		Helsinki 1952	1953	1954	1955	Melbourne 1956
第1部	競技会役員 (大会役員)					
	111 競技会役員 (大会役員)		^			^
	112 総務					
	113 秘書					
	114 技術総務員		^			□
	115 上訴審判員					—
	116 審判長 (各審判長)		—			^
	117 審判員					
	118 監察員		—			
	119 計時員		—	—		
	120 スターターおよびリコール・スターター (出発合図員)					
	121 出発係 (召集員 <出発合図員補助員>)		—			□
	122 周回記録員		—			—
	123 記録員					^
	124 場内司令					
	125 通告員					^
126 公式計測員						□
第2部	競技会規則					
	141 申込み					—
	142 競技会		—		^—□	^
	143 予選と組合せ (ラウンド・予選と準決勝)		^—	^	—	□
	144 刺激剤		—			
	145 計測と計量		^—		^—	
	146 同成績 (同着と同記録)		^—	—	—	
	147 抗議 (異議 <Proteste>)		—			—
	148 世界記録, 日本記録と日本国際記録 (日本記録 日本と国際記録)		^—□	—	^—	—□
	149 公式陸上競技用器具 (公式陸上競技用具)					
第3部	競走競技					
	161 トラックとコース		—□	—	□	
	162 スタートとフィニッシュ (スタートと決勝)		^—		—	
	163 ハードル競走		—			—
	164 障害物競走		^		□	—□
	165 マラソン競走		^□		□	
	166 リレー競走		—			—
	167 チーム競走			□	—	
	168 クロス・カンントリー競走					^

□ あらたに付加された事項

— 一部修正

^ 削除および一部削除

改, 修正について

1957	1958	1959	Rome 1960	1961	1962	1963	Tokyo 1964	1965	1966	1967	Mexico 1968	1969	1970	1971
								^						
								-□						
					-			-						
								□						
								^ - □						
								^ -						
								-						
			^ □					-□					-	-□
								^						
			□	-				-						
			-					-						^ - □
								-						
								^ -						
								-						
			^ - □	^ □				□						
								^ - □				^ - □		^ - □
								-				^ - □		-□
								-				□		
								-						
								^ - □				□		
								^ - □						
								^ - □						
			-□	^ - □			-	^ - □				^ - □	^ -	-
								-□						
			□					^ -						
			□					-						
								^ - □						
								-□						
			□					^ - □						
								^ -						
								□						

第3表のつづき

		OLYMPIC GAMES	Helsinki 1952	1953	1954	1955	Melbourne 1956
第4部		跳躍競技 (走高跳, 走幅跳, 三段跳) (立高跳, 立幅跳が加わっていた)					
	171	総則		△—□	□	△—	□
	172	走高跳		—			
	173	棒高跳		△—□	△		□
	174	走幅跳		—			
	175	三段跳					□
第5部		投てき競技 (やり投, 円盤投, 砲丸投, ハンマー投)					
	181	総則		—	□	△—□	
	182	やり投		—		△—	
	183	円盤投					
	184	砲丸投				—	
	185	ハンマー					
第6部		投競歩競技					
	191	競歩競技		△—□		—	□
第7部		混成競技					
	195	五種競技と十種競技		—			
第8部		公式用器具と規格 (公式用具と器具との規格)					
	201	跳躍用器具 (跳躍用具)		—		—	△ — □
	202	棒高跳用棒		—□			△ —
	203	踏切板 (走幅踏と三段跳)		—			□
	204	やり				—	□
	205	円盤		—			□
	206	砲丸					□
	207	ハンマー					— □
	208	ハンマー投, 円盤投用の囲い (ハンマー投用のかこい)		△			— □
	209	サークル		—		—	—
	210	足留材 (砲丸投)					— □
	211	サークルあるいは円弧から投げる投てき角度					
	212	角度標示旗					
	213	ハードル				□	△ — □
	214	リレー・バトン				—	—
	215	スターティング・ブロック					—
	216	決勝柱					□

1957	1958	1959	Rome 1960	1961	1962	1963	Tokyo 1964	1965	1966	1967	Mexico 1968	1969	1970	1971
			□		—			—□				—		
			□		—			^—				^—□		
			□					—□				^—□		
								—□						
			—□ ^		—			—				—		^—
			—□		—									
								^—□						
			□		—			^—□					—□	
			□ ^		—			—□				^—□		—□
					—							□		
					—			^—				^—	—	
			□		—			—□						
			□		—			—				—		
					—			—						

直線のスタートにおいては側方にうつしてもよくなったこと。また、より正確な出発を期するためにリコール・スターターを設けたことである。

② トラック競技において走る距離が短くなったと判断した場合は失格とするという考え方が明確にされたこと、これはコーナーで白線を踏むと反則ということであるが、ハードル競走やリレーにおいて隣りの走者を妨害しないかぎり、コーナーで外側を踏むとか、直走路で内側、外側の白線の外にでても、競技者の走る距離は短くならないので救ってよいという考え方である。また長距離競走でせりあう場合、内側の走者が外側から押されてフィールドに足を踏みこんだ場合も同様の解釈である。

③ オープンで行なわれる競走では、追抜いたときは、前の走者から 2 m 先んじてからでないとい内側に入ってはいけないという規定が削除され、故意に横切ったり、押したり、妨害すれば失格するというように抽象的に改められた。そのため、反則を未然に防ぐために 800 m においては最初の 100 m を、4×400 m においては 500 m までをセパレートにして、妨害行為を少なくしようとしている。

④ 決勝順位の考え方が変わったこと、これは従来は順位の判定は走者の身体が決勝線を通過することを前提として、胴体が決勝線に到着した順序をもってきめていたが、現在では身体の一部が決勝線を通過しなくてもよいとなった。このため判定が難しくなり、現在では写真判定機を用いている。

⑤ スタート・ライン、ゴールライン、リレーのテークオーバーゾーンのラインの性格を明らかにし、白線 5 cm は走距離内に含まれることとし、スタートの白線は手をかけてはいけないこととして、また、ゴールの白線は走距離に含まれないこととしたのである。これらのことは戦前までは莫然としていた。オープン競技におけるスタート・ラインは、現在ではどの競技者もほぼ等しい距離を走るようにカーブのあるラインがひかれ競技が行なわれているが、これは公平の精神に則したものと見えよう。4×100 m リレー、4×200 m リレーのテークオーバーゾーンがはっきり白線で示され、両側の白線はどちらも 20 m の距離内で、中央の白線は出発線と同じようにひかなければならない。更にリレーの記録向上とともに準備助走のできる 10 m 手前のブルーラインが設けられ、これは記録の更新という面からみてかなりの好影響を与えている。

⑥ フィールド競技でぐずぐずしている競技者は失格させられるという規定、これは棒高とび 3 分、それ以外の種目は 2 分という時間が決められ、その時間内に試技をしなければならなくなった。このことは競技運営の面からも、また、競技者に対して公平の原則を適用したことは画期的な規定である。

⑦ 走り高とびにおいて従前のダイビング禁止の規定がかきあらためられ、片足で踏み切らなければならないとし、頭や手が先にバーを越えるスタイルのとび方——ベリーロールや背面跳があらわれた。また、踏切足のスパイク・シューズの裏側に弾力性のあるゴムをはりつけるものがあらわれたために、靴底の厚さが 13 mm を越える靴をはくことは禁止され、かかとの厚さは靴底の厚さより 6 mm を越えてはいけなくなるとされた。

⑧ 走り幅とび、三段とびの踏切板の先にある Plasticine Indicator に踏切足が足跡を残せば無効となり、残さなければ有効とすること。立幅とびと立高とびが削除され、三段とびで使わない方の足が地面にふれると 1 回の無効とすること。

⑨ 走り高とびや棒高とびの順位の決め方について決められたこと。これは ④ 同記録

になった高さを早くとんだ者より、⑥ 無効試技数の少ないもの、⑦ 試技全体数の少ないものの順に順位を決め、⑧ 決められない場合は、第1位のときに限り失敗した高さで1回の追加試技あるいは、バーを下げたり上げたりしてきめる。また、パスは同じ高さでも異なる高さでも3回つづけて行なうことが出来るというパスの規定が明確にされた。

⑩ サークルで行なう投てき種目においては、投てき後サークルの後半部から出なければ無効とすること。またサークルから投げる投てき競技は「90度の角度をなす線の内側の端の両端内に落ちたものが有効」であったが、現在では砲丸投 65度、円盤、ハンマー投は45度に規定された。このことは記録が伸びたために一定方向に投げなければ危険であるためであろう。^{注(1973年からは砲丸投も45度に改め)}

⑪ やり投の投てき線が直線で行なわれていたものが円弧に変わったことは、計測が合理的に行なわれるようになった。

⑫ 投てき物の規格が厳密に規定された。とくに「やり」においては Dick Held が考案したものが、従前のものにくらべて非常に滑空性があり、飛距離も一段と伸びたので「やり」の規格が一段と厳しいものとなった。丁度この頃、やり投において「円盤投式」の投法が工夫され、投てき距離も100mをこすものもあったため、投てき終了までは投てき方向に背面をむけてはいけないことも規定された。

その他、スターティング・ブロック、ポールボックス、あるいは助走路を使用する種目におけるマークの使用は、グラウンドに穴を掘ったり、傷をつけたりすることを禁止した。これは競技者が、皆同じ条件で競技ができるように考えられたものであり、更に、オール・ウェザーのトラック、助走路、コンクリート製のサークルの考案は、平等の条件で競技ができるように配慮されたものである。また、投てき競技の進歩により、その安全性を確保するためにかこいが設けられ（ハンマー投、円盤投）、投てきエリアの許容角度もせばめられてきた。（ハンマー投、円盤投、砲丸投）安全性の面からは、走り高とびや棒高とびの着地場のマットの改良もあげられる。これは、技術の発達に関して大きく貢献している。

結 語

今なお年々競技規則は改正されつづけているが、いつになったら完全な規則となりうるかは予測できない。公平に競技ができるようにとの配慮から改正されるのではあるが、細かく規定して競技者をしぼりつけることは、スポーツの求めている本来の姿ではない。機械化による勝敗の正確な判定は認められるとしても、短距離のスタートのように、不正か否かの出発の確認は人間の目で行ないながら、ゴールにおいては1/100秒単位という人間の目では判定できないことを機械にやらせている。砲丸投げを除く他の投てき競技の測定単位が2cmであるのとくらべると、ちぐはぐな面が目立つ。短距離のように記録の短縮が年々むづかしくなっていく種目においては1/1000秒単位で判定する時代がくるかもしれない。現にミュンヘン大会の水泳競技においては3/1000秒差で金、銀をわけた種目もある。それは競技の高度化とともに、結果に重要な価値が付与せられるようになったためであろう。また規則の解釈の仕方、たとえば「やり」の改良により滑空性が高くなって落下角度が小さくなり、落下した痕跡をめぐる規則の解釈の仕方のちがいが等もでてきている。いざこざなく競技が円滑に進行する時代がくれば、規則の改定のあゆみを止めるであろう

が、人間の限りない欲求がある限り、記録的に有利な方向に改定されるであろう。
なお、まだ多くの改定がなされたが、これらの事項については他の機会にゆずりたい。

参考文献および参考資料

- R. L. Quercetani: A World History of Track and Field Athletics 1864~1964. Oxford Univ. Press 1964.
- P. C. McIntosh: Sport in Society 1963.
- 日本体育協会 50 年史 石井光次郎 日本体育協会
- 日本スポーツ 100 年 石井光次郎 日本体育協会
- 新訂 運動競技規則総覧 広瀬謙三編 有名社 (昭2年)
- 陸上競技の粹 高根沢光位・渡部 正 慶文堂書店 (昭2年)
- 昭和3年~昭和46年 陸上競技規則-日本陸上競技連盟編
- I. A. A. F. Handbook 1969, 1971/1972 I. A. A. F. London.